

# 仕組まれた〈セクシュアリティ〉

—— 黒木香論の地平から ——

村瀬ひろみ

## はじめに

“おんな”をやっていくのは、大変です。その“おんな”をやったうえで、自分をエロ的存在だと肯定し、オトコと納得のいく性的な関係を結ぶのは、もっと大変なことです。この〈制度〉の中で安閑としていては、自己の「なし崩しの死」が待っているだけです。〈制度〉の中で骨抜きにされて、ただ流されていくエロスがあるばかりです。この流れに逆らうという困難に立ち向かったひとが、わたしにとっては黒木香でした。黒木香は、アダルト・ビデオ・モデルとなることで、この〈制度〉から逸脱し、自分の中のエロス（性的な欲求や欲望）と真っすぐに向き合っていました。そして、彼女は私たちに、“おんな”性と折り合いをつけるためのもうひとつの道筋を示してくれていました。黒木香の問題は、私たちの問題でもありました。黒木香の戦略を、わたしはそのデビューの1986年から、固唾を呑んで見守ってきました。しかし、彼女の戦略は、あまりに捨て身の戦法でした。

さて、あれから約8年の月日が流れて、黒木香の名前すら忘れかけていた日々の中で、彼女の転落事故はおこりました。そして、あわや自殺未遂かとまで騒がれたのです。彼女のゲームは命懸けのものだったのかと、わたしはその時、案じました。黒木香の戦略が戦略として生きるためには、それはあくまでもゲームでなくてはなりません。その後、黒木香は自殺未遂ではなかったとマスコミによって報道されました。安堵の思いに、ほっと胸をなでおろしながら、ゲームが命懸けのものになってしまった、幾多の女の友人たちを思い出します。ある娘は“おんな”をやれず、自分の中のエロスにも目をつぶってあるオトコに自分を賭けてしまいました。オトコは女を持って余し、女は狂気のなかで手首を切りました。いえいえ、そんな娘たちばかりではなく、身近にいる元気印の友達も、ダイエットや化粧品の情報に振り回されて、文字どおり身を削っています。それを、ただのゲームと言ってしまっても良いのか、躊躇してしまいます。私も、そのゲームに囚わらずも乗せられている1人であるからです。願わくば、ゲームをゲームと割り切って、軽やかに戯れて生きていけんことを。

本稿では、黒木香のたった自分のおんな性と向き合い方を検証していくことによって、あの時代なぜ女たちに黒木香が受けたのか、どうして黒木香がうまく生きられなかったのか、黒木香と名のるおんなが、どうして黒木香という仮面を捨てられなかったのかということを考えていくつもりです。それらの考察を通して、時代の用意したこの生きにくい状況を、少しでも

掘り下げてみたいと思うのです。

## 0. 黒木香をめぐる言説

上野千鶴子は、中村雄二郎との共著『〈人間〉を超えて』のなかで、黒木香の自伝『自堕落にほどがある』についてかなり思い入れを込めて言及しています<sup>1)</sup>。そのなかで、上野は母親に祝福してもらえなかった黒木香の初潮体験や、受動性を刻印することになる痴漢体験について触れ、ブルジョア性道徳<sup>2)</sup>を内面化したその性的自己のありかたを〈古典近代〉としています。それは男権的な社会における女性の性的身体の獲得過程、すなわち自己の身体を客体化して「自己放棄」へと至るプロセスを意味するものでした。その「〈古典近代〉が〈ポストモダン〉のメディア状況を逆手に取る——ミスマッチとずれがこの、このおかしくも悲しい一世のヒロインを生んでいる」<sup>3)</sup>と上野は語るのです。

黒木香があれほど女性に受けたのはなぜでしょうか。『週刊ポスト』(1989年1月)で行われた上野千鶴子と小倉千加子の対談のタイトルは「男たちよ！ 女たちはなぜ百恵、聖子、黒木香が大好きなのか」<sup>4)</sup>ですし、1994年『クレア』の黒木香ロングインタビューで<sup>5)</sup>、記者の井田真木子は「強烈な個性と頭の回転の早さで、あらゆるメディアで活躍していた彼女だけけれど、この人の可愛さ、一途さを見抜き、最も愛していたのは私たち女のこではなかったか。」と、問いかけています。(この号のクレアは、はやばやと売り切れになってしまいました)。

もっとも、黒木香を古典近代であると喝破した上野千鶴子は、前出の対談中で黒木の女のこに対する人気を「エッ、まだこんな人いたのっていう生きた化石を見るような驚きです。だから今の女性たちにとって、彼女はパンダに劣らぬ一種の珍獣。一種の見世物を見る感覚で見たい」<sup>6)</sup>と分析しています。軽やかに〈女〉を楽しんでいるように見える「今の女性たち」にとっては、性にこだわり、ワキ毛を見世物にして「おかしくも悲しい一世のヒロイン」を演じる黒木は、確かにダサくて風変わりに見えるのかも知れません。女たちのオプションも広がり、性的抑圧も軽くなってきたと言われた80年代において、黒木の〈性〉への執着は珍しい行為であったのかも知れません。しかし、女のおかれている基本的な構造が80年代に変わった訳ではないと思うのです。ただ、抑圧が拡散され、見えにくくなったのに過ぎないのではないのでしょうか。1995年の現在、この傾向はさらに進んでいます。「今の女たち」もまた、〈古典近代〉の女たちとは違う形で、振り回されているのではないのでしょうか。それを〈ポストモダン〉であると、決して楽観してはなりません。

特に、性的自己形成過程の根底の部分において、〈古典近代〉を脱ぎ捨てることの出来ない女たちが、黒木香に共感をしていったのではないかと思うのです。〈古典近代〉を徹底することで〈古典近代〉を脱出しようとした黒木香のこのシナリオが、女たちの共感と呼んだのではないのでしょうか。

黒木香が一世を風靡したのは、男たちに人気があったからだけではありません。男たちにだけでなく女たちも黒木香に共感していったことが、その大きな理由になっていると思います。つまり、マスメディアが作り上げたクロキ・カオル像は、男の性的欲望の対象というだけでは

なく、女の状況の代弁者あるいは逼塞状況の破壊者としても非常に魅力的だったということなのです。あの1980年代が見せてくれた、クロキ・カオルの夢は、結局1995年の段階では破れたようにみえます。その夢は、病んだ時代が見せた1つのまぼろしであったのかも知れません。しかし、彼女が熱狂的に受け入れられていったあの時代の意味を検証していくことなしに、黒木の、ひいては時代の病を見ていくことはできないと思うのです。

では、セクシュアリティにとって〈古典近代〉とはどんな時代だったのでしょうか。そこでは、どんな性的自己の形成が可能であったのでしょうか。そして、ポストモダンのセクシュアリティの可能性はどんなものなのでしょうか。

黒木香の本名は、恵子といます。恵子はどこにでもいるような、国立大に通う女子学生でした。その恵子が、どうして黒木香になったのか。恵子から黒木香への変遷を通じて、何が見えてくるのでしょうか。

## 1. 「エロスの身体」から、「魅惑する身体」へ

女たちにとって、所有されることが、愛や優しさや肉体的愛情に関する自分の欲求を満たすセックスである、それゆえ、女たち自身が本性上、所有されることを激しく欲望している、とまで意味づけられるようになっていく。あなたを奪い、あなたを犯す男によって官能的に所有されることが、女であることや女らしさや男に欲望される存在であることの肯定——肉体に課せられた意味深い肯定——になっている。[A・ドウォーキン『インターコース』より]<sup>7)</sup>

「所有される」ということは、自分が商品としてだれかに価値を見いだしてもらって、初めておこることです。自分が所有される価値のある者なのかどうか、女の子は常に意識し続けなければなりません。小倉千加子は、『女の人生すごろく』のなかで、「自分の身体が異性の欲望によって消費されるために社会に流通する記号だ」という認識をもった時、その子は、たとえ小学校2年生でも思春期なんです<sup>8)</sup> と言い放ちます。

この、女性の性的身体獲得の局面を分析するために、ここで、3つの基本的概念を導入したいと思います。それは、(1)「受け身的身体」(2)「エロスの身体」(3)「魅惑する身体」の3つです。では、以下に順番に説明していきたいと思います。

「受け身的身体」とは、異性の視線によって形作られる身体像です。ドウォーキンや小倉千加子らが指摘するように、女にとって性的身体は、まず異性によって欲望され、所有される身体として現れてくるのです。そこでは、女自身が自分の身体に付与する性的な意味付けや価値は、問われません。男の視線によって、男の価値に自分をあわせていく受動的な身体像があるだけです。その受動的な身体像は、女を抑圧せずにはられません。女たちは、男にとって「価値のある」身体であろうと欲し、身を削っていくのです。

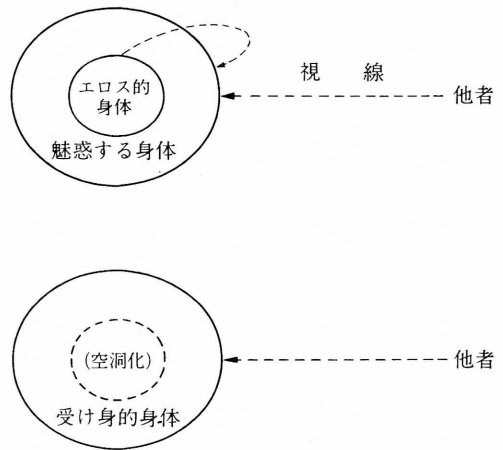
それでは、女にとって抑圧のない(あるいは少ない)性的身体の自己像は存在しうるのか

しょうか。あるとすれば、それはナルシズムすれすれの、女自身にとって価値ある性的身体の可能性だと思うのです。自分の性的身体を、男の価値観を経由しない形で自分で認めるということ。そして、ナルシズムに淫しないことが重要です。性的身体が、他者（異性でも同性でも）<sup>9)</sup>に開かれた性愛関係を導くのですから、自己の殻に閉じこもることは、その性的身体の本質を失うこととなります。

女自身にとって価値のある、そのような性的身体像を、わたしは「エロスの身体」とよびたいのです。「わたしがわたしであることが、女としても価値のあることなのだ」という意味の全面的肯定なのです。

しかし、「エロスの身体」には、異性に対峙するような身体が射程に入っていません。では、「エロスの身体」をもって、異性に向かうということはどのようなことなのでしょう。わたしは、そこで「魅惑する身体」を考えたいのです。「エロスの身体」を獲得した女が、そのエロスを自覚的に異性にさしむけ、その異性を性的に魅惑できる身体を獲得したとき、わたしはその身体のことを「魅惑する身体」を呼びたいのです。「魅惑する身体」の獲得は、男によって押し付けられた性的身体像をなぞること（「受け身的身体」）とはことなっています。男によって意味付けられた性的身体像はいくらなぞってもなぞっても、後に述べるように揺れていくのです。

「魅惑する身体」とは、1つの力です。自分で自分の装う意味と目的を知って、自身の身体によって異性を“魅惑する”のです。そして「魅惑する身体」の背後に「エロスの身体」が存在していることが重要なことなのです。「エロスの身体」を根幹にもつことなしには、「魅惑する身体」は、あり得ません。これらの3つの概念を図式化すると、図のようになります。



通常、女の性的身体の価値は男によって造られ、男によって指し示されているのですから、女には、存在の初めからその価値に応じるような道しかありません。女の美が、それ自身で価値があるわけではありません。この性的身体は、男によって消費されてはじめて価値を持つのです。普通、女の身体においては、女自身が感じる美の価値「エロスの身体」は、疎外されていくのです。

「エロスの身体」と、「魅惑する身体」の間でさえ、大きな隔たりがあります。外部から押し寄せてくる視線は女に「エロスの身体」を破壊しねじ曲げていくことを強要してきます。その一方で、ある種のトレーニングをつめば、女たちは魅力的な身体を簡単に得ることができます。どのような服がセクシーなのか、どのようなメイクが色っぽいのか、どのような仕草が男を魅き付けるのか。それなのに、たとえ女たちが魅力的な身体を手に入れたとしても、その価値は男の側に属するものです。「昼は淑女で、夜は娼婦のように振る舞ってほしい」「妻にする女と恋人にする女は違う」という男たちの言葉を取ってみても、そのことは明白なのです。女は、



男の目線に併せて、淑女と娼婦の間をうろうろとさまよわなければならないのです。

女に対する性のダブルスタンダードは、処女マリアか、男を滅ぼすファムファタール<sup>10)</sup>のどちらかに女を分類します。その意味でも、「昼は淑女、夜は娼婦」というのは言い得て妙です。もちろん、個人によってマリア型の女がいいという人もいるし、ファムファタールっぽいのが良いという人もいるでしょう。その両極端のあいだで揺れる男たちの好みも、女の身体に反映して、女たちも揺れざるを得ないのです。女たちはその両方に常に引き裂かれているのです。そして、男に合わせて、ほどほどの女を自己演出していくことになります。

さて、学校制度の中の性教育では「魅惑する身体」「エロスの身体」の価値は教えられません。性的な面をもつ女の身体を発見して、この自分の性的な身体を自分で認めてよいのどうか戸惑っている思春期の女のこたちに教えられるのは、母性の称賛だけなのです。

『モノグラフ・小学生ナウ 性成熟』(福武書店 1990)<sup>11)</sup>によれば、初潮という性成熟のサインを喜ばない子供は70%にもたっします。新しい性教育では、初潮を「祝福すべきもの、健康の証し、あなたの身体が、子供を産めるような立派なお母さんの身体になる、その証し」としていますから、これはなぜなのでしょう。初潮の意味は、ここでは母になって、子供を産むべき誇らしい身体と結び付いているだけです。母になる前に通らなければならない、セクシュアリティやエロスの問題はまるで存在しないかのようです。だれも女の「魅惑する身体」について語りはしません。ただ、大人へと変容していく「エロスの身体」があるばかりです。「エロスの身体」は、「母性」の方へねじまげられ、「魅惑する身体」の価値は虐げられていきます。母になる前に通る性的自己の受容は、黒木香が、古典近代の化石として扱われるポストモダンの現代でさえ徹底的に無視されているのです。女にとっての性的自己の受容は未だに「甘美な秘密<sup>12)</sup>」などではあり得ず、忌避すべきやっかいなものなのです。

## 2. 「恵子」の「エロスの身体」

女のこの身体の成長が、エロスの自我めざめに比して早熟であるとき、自己の「性的身体」の価値について知るといことが、彼女にとっては暴力的であることさえあるのです。

例えば、恵子の場合もまさにそうでした。彼女は早熟な子供で、小学校5年の夏に初潮をむかえ、同じ年の冬、はじめての痴漢体験に遭遇するといったあんばいでした。恵子はそのときの事を、このように書いています。「わたくしは早目にベッドにもぐりこみ、寝つけないままに、わたくし自身を責めさいなみました。こんな目に遭ってしまったということは、自分にどこかしら、スキがあったに相違ないのです。わたくしの内部に、男性の劣情を挑発するものがあるとするならば、なおのことそれは隠していかなければなりません。」<sup>13)</sup>

しかし、性的身体の価値とは、男の欲望との関係性の中で成立するものです。だから、性欲を「劣情」といい、その価値を認めないとき、性的身体の価値も同時に蔑まれていくのです。ですから、そのような価値観のなかで、恵子がとった道が「魅惑する身体」の否定だったといってもおかしいことではありません。「魅惑する身体」の価値の否定的な側面を外部から与えられて、恵子の内部にもともとあった自己肯定的な「エロスの身体」観は、修正を迫られて

しまいます。アングルやクールペの描く裸婦像にあこがれたこの少女は、一方で痴漢狂態の満員電車にもまれながら、外部から押し付けられた性的身体の否定的な価値に従容と従うことを自覚的に始めていくのです。それが、「男性と接点をもたない鎖国状態の生活<sup>14)</sup>」だったので

す。その、自閉による「性的な身体」の抑圧は、恵子が芸術家への道を選んだときに、やっと少しほどけていきます。恵子が芸術を通じて学んだものはたくさんありましたが、なかでも自分の思い描く「エロスの身体」の確信こそもっとも大きなものだったのでしょうか。そして、それは、「魅惑する身体」につながるはずのものだったのです。

「裸体画のデッサンの授業で、全裸のモデルさんを前にしたとき、女性が本来もつおおらかエロティシズムの魅力を、初めて理解することができました。社会はなぜこのような魅力的な女性美を隠蔽したり、去勢したり、あるいは逆にことさら歪めたりするのであろうかと思いました。わたくし自身をふくめ、女性につくられた“女らしさ”のイメージを演じるように強いられており、文化も教育も、その性差別を維持する装置として機能していることが、クリアに見えてきたのです。」<sup>15)</sup>

恵子にとっては、外部からの「受け身的身体」の押し付けは自明なものであったのです。しかし、それに屈服することは自分の「エロスの身体」を手放して、ほどほどの男の目線に合わせていくことを意味します。そのとき、彼女がとった方法が、あの黒木香のトレードマークとなった腋毛なのです。恵子は16歳のとき、ヘルムート・ニュートンの写真集をみて腋毛を生やしはじめます。「…わたくしは脱毛クリームを塗って、『おんな』を演じる馬鹿げたお芝居から降りることを決めたのです。これはけっしてプロテストではなく、野生への回帰でもなく、横滑りの脱走経路の発見そのものでありました。」<sup>16)</sup>

この「横滑りの脱走経路」こそが、恵子の迂遠な、しかし、確かな「魅惑する身体」に至る道だったのです。あの腋毛の下には、主体的に「エロスの身体」を魅せつける意志がわずかに見えていたのです。

### 3. AV女優—黒木香の誕生

#### AVまで

「恋が終わってしまったから老いた、のではありません。世界の涯てを見てしまって、そのどん詰まりの袋小路で遊び続けていたにすぎないのでから。恋の終わりが老成をもたらしたのではなく、祭りの狂騒が終焉を迎えて、すでに老いてしまった自己の真の容貌に、ようやく視線を向ける暇が与えられたというだけなのです。」<sup>17)</sup>

恵子は、21歳の春に1年半つきあったSという男性とわかれます。Sは妻子もちで、恵子とはいわゆる不倫なのですが、別れはそのことが原因ではありません。Sが海外へ旅立つことが直接の原因ですが、恵子は「少々疲れておりました。可愛らしく微笑むことや、何も考えていない風を装うことや、コケティッシュなしぐさや従順さを演ずることに」<sup>18)</sup>と書きます。彼女は、男の目線に合わせた「受け身的身体」を形づくることに疲れ切っていたのです。しかし、

そのときでさえも、「魅惑する身体」のあるべき姿は恵子には見えていませんでした。

恵子が望んだのは、少女時代と同じ、つましく自閉していく道なのでした。「受け身的身体」と「魅惑する身体」のあいだで踊らされて疲れた彼女は、そこから遠ざかろうとします。これからの人生は老後なのだ自分自身に言い聞かせ、宗教美術を研究する学徒として生きていくことを決意します。「ガキでなくなった自分」に気づいて「自立しなくてはならない」恵子は、そのためのイタリア留学の資金を、親に出してもらうことはできなかったのです。アルバイトをしたことのない恵子にとっては、道で「モデルになりませんか」と声をかけてきたスカウトマンだけが、頼りだったのでした。

しかし、スカウトマンが、言いくそくに口にした「アダルト・ビデオ・モデル」という言葉が、恵子のその後の人生を変えてしまいました。そして、偶然にも、村西とおるのところへと紹介されることになったのです<sup>19)</sup>。村西とおるは、自らを「性の求道者」と呼んではいけられないような人です。その村西のところに「魅惑する身体」を求めて恵子が来たのですから、それはまさに運命的な出会いだったのかも知れません。

### 抜けないAV

黒木香の第1作は、AV業界では型破りのヒットを飛ばしました。アダルト・ビデオ業界では、3千本売ればヒットです<sup>20)</sup>。黒木の「SM ぼいの好き」は1万本を越えているのですから、大ヒットなのです<sup>21)</sup>。その第1作「SM ぼいの好き」は、抜けないビデオとして有名です。抜けない—というのは、AVビデオの実用的価値〈マスターベーションをするときのオカズ、古い言葉でのオナペット〉がないということなんです。実際、対談の中でほとんどの男の人が抜けないと言っています<sup>22)</sup>。これはどうしたことなのでしょう。

前出の小倉千加子との対談の中で、上野千鶴子は「黒木香のビデオは、女のオーガズムをあの手この手で追求してるじゃない。女のこたちはそれを食い入るように見ながらオーガズムを学ぶ。それが一種の規範になるから、実際に性行為やった時に「おかしい、どうして私は黒木さんみたいにならないんだろう。」あんたのテクニックが悪いのよ、あんたが下手なのよとなるわけで、あれは男に対してすごい脅迫なのよね」と言っています<sup>23)</sup>。

あの手この手で、オルガスムスを追求して行くことは、男を奮い立たせる文脈だったはずで、江戸時代の吉原では、遊女をイカせるのが通で、粋ではなかったでしょうか<sup>6)</sup>。それなのに、実際、黒木香のビデオを見てもだめだというのですね。

当時、人気のあったAV女優に「小林ひとみ」、ちょっと遅れて「桜木ルイ」が出て来ます。彼女らのビデオは男の子に絶大な人気を誇ります。いまでも、桜木ルイは永久保存版だと大事に取っている人も多いのです。黒木のビデオではそんなことはありませんでした。話題になった、売れた、が、しかし、本来のAVファンの男の子には人気はあまりなかったと思われる。実際、普通のAVにはあまり興味のなかった層が見ているという指摘もあります<sup>24)</sup>。

では、桜木ルイのビデオと黒木のそれは、なにが違うのでしょうか。男のほどこす性行為で、女が気持ちよくなっていくという文脈は変わりません。しかし、黒木のビデオには男など必要ないのではないかと一瞬思わせるような迫力があります。『自堕落にもほどがある』のなか

でも繰り返し描かれています。常に自分を意識した性表現のための意志があるわけです<sup>25)</sup>。快感を覚える自己の徹底的な肯定によって、それはなされているのです。ほかのAVの女のこのように、男にリードされて、ただ快楽に身をまかせ、という演技とは一線を画しているのです。

つまり、黒木香は、男の子の持つ性幻想の規則に沿いながら、その規則を過剰に生きてしまったために、「抜けないビデオ」を作ってしまったのかも知れません。または、女は男にリードされるものだという規則に対し、意志的に徹底的に服従することで、リードする男を不安がらせてしまっているのかも知れません。

なぜ、不安なのでしょう。男が快感を覚えるためには、〈女が快感を感じる事すらも、自分がコントロールしている〉という征服感が不可欠だからです。私はこれを「性の政治」と呼びたいのです。黒木はちっとも男を征服させてくれた気分にしてくれません。常に男に挑み、「自らの意志の力で自分自身を征服させる」のです。これは、逆説としか言いようがありません。

男が、女に快感の手ほどきをするのは、ポルノの常套コースです。そのために、念入りに、処女が選ばれ<sup>26)</sup>、素人っぽい女の子が受けます。ロリコンに至っては、少女が性の対象に選ばれさえるのです。その善悪をいうつもりは全くありません。後にも述べるように、性幻想のなかでは、どんなことも有り得るし、自分がどのような性幻想を持っているか、ひいては自分の欲望の回路に自覚的になることからしかすべては始まらないと思うからです。

### 「性の政治」

「性の政治」は、ケイト・ミレットの言葉です。

ここでは、A・ドウォーキンという命題を思い出さなくてははいけません。その中の、「すべての性関係は、レイプである」という、ドウォーキンの第2のテーゼはまさに真実を突いたものなのです。

この場合、レイプと言っても、男の性幻想のなかにある興奮度のたかい筋書きは女を征服するというもので、女の性幻想の中にある興奮度の高い筋書きは男に征服されるというものだったという構造（この時の男の欲望の形をS性、女の欲望の形をM性と呼びたいと思います）をレイプと呼んでよいとすれば、ですが、ですから、このときのレイプは基本的には和姦だともいえるのです。女だって気持ちよくなって、お互い納得ずくなら問題なんてないはず。どうして、それが問題になったのか。簡単なことです。「性の政治」はベッドの外までも縛っていくからです。

いくら、日常生活で対等だと言っても、性のなかで内密に処理されるはずだった性幻想がベッドの中だけに止まるという保証はどこにもありません。「1回寝たら、恋人気取りなんてやだよ。自分の女だと思って！」<sup>27)</sup>ということもありますが、もっと本質的な問題が存在します。性は隠蔽されていると同時に、実は露にされているものだからです。性は、社会的なものであると同時に、個人的なものだ<sup>28)</sup>と言い換えても良いでしょう。本当は、はっきり切り離せるのなら一番よいことなのでしょう。しかし、性という事態が、生殖に結び付く限り、結

婚などの再生産の制度に組み入れられていくのは、確かな事なのです。

性の中（言い換えれば、ベッドの中）だけに限定されるはずだった女のM性は、社会的にはびこるさまざまな馬鹿馬鹿しい言説——女は男に劣る（征服されちゃうんですから）——の根拠付けとまではいかなくても、それを保証し補完する役割を果たしていると思うのです。この言説がまた、女性の性幻想を教育していく、という悪循環になっているのです。

もちろん、逆の方向からの見方もあって、男権の社会が性行為を規定していくのだということも考えられます。前出のA・ドウォーキンが、次のようにいいます。「男の権力——ペニスの権力——の世界において、普通の人間の男が行なう性交は、本質的に、権力と性能力と所有が合体した性的経験である。己の力によって、男は女を犯し、所有する。その時、男も女も、社会が性交に参画し、社会の権力を所有という形で性に与え、社会がベッドの傍で密かに声援したり、朝、シーツの血をチェックしたりしていることを、知ってはいないようである。」<sup>29)</sup>確かにドウォーキンが言うように、社会が性行為を規定しているのだから、社会を変えなければ性行為も変わらないという指摘はまさに重要で、その通りなのだと思います。

しかし、最近のような、オプションさえ増えれば、性対象としての異性というものさえ変わり得るということが明らかになっていく状況では、男のS性、女のM性といった簡単な割り切り方などできない側面もあります。オプションさえ増えれば変わり得るという実験をしているという点では現代はまさしくポストモダンと言えるでしょう。しかし、それでは、旧弊の異性愛に捕らわれている人々には、ポストモダンはあり得ないのでしょうか。いったん刷り込まれたもの（古典近代）はなかなか消えないものなのです。その苦しさは、黒木香への女たちの共感に繋がったのではないかと思うのです。

### 女たちの戦略

女のM性が問題だったのでした。女たちは社会から強制されていてM（マゾヒズム）を選択したのかも知れません。しかし、今や女にとって、M性は快感を得る水路に強く刻み込まれているのです。では、女たちはどうしたらいいのでしょうか。

幾つかの戦略が考えられます。

第1の戦略は、禁欲です。自らの欲望回路を、社会的な女の抑圧状況と結び付いたその状況ゆえに認めないのです。

第2の戦略は、別の欲望回路を作る試みです。エロスの回路を男に向けないなどの——これはレズビアンフェミニズムのもつ戦略の1つですが——平等な性愛の形を模索して女のM性を変える努力がある訳です。この実践はアメリカで盛んで、女の作る女のためのポルノはエロチカと呼ばれて区別されます<sup>12)</sup>。「女も男並に」と言う解決ではなく、性幻想を抑圧のない形に飼いつけようとしているのだと思います。ですから最近の〈女もメイルレビューを見にいき、男から性のサービスをお金で買うといった風潮〉とは一線を画すと思うのです<sup>13)</sup>。もちろん、男並の平等を求める波の勢いは強いものです。結果的にオプションが増えることで、女は生きやすくなると思います。女が男並の性幻想を抱いたとき、だれかが（男であれ女であれ）被抑圧的な性幻想を選び取っている、又は取らされているんじゃないか、その人たちに対して、

困難な女の状況を再生産しないのだろうかという不安が、常に残ります。

ここで、簡単に日本の状況を紹介しておきます。確かに、近年、女が性的欲望の主体になりつつあるという動きが感じられます。日本の女のポルノといわれている「レディースコミック」<sup>30)</sup>を見ても、性の情報誌と銘打った月刊誌を見ても（セックス専門誌というのは男向けには昔からありましたが、女向けにはここ2～3年で3誌も創刊されています）<sup>31)</sup>女だって性の欲望はあるんだ、それをあからさまにしてもいいんだというふうに変わって来ていると思います。しかし、です。書かれている内容の多くは、女のM性に寄り掛かったものなのです。

藤本由加里によるレディースコミックの分析では、繰り返し描かれる黄金パターンというのが抽出されています<sup>32)</sup>。また、女性用のセックス専門誌に繰り上げられる女の写真や物語は、女の欲望が男の視線によって成り立っているとしか思えないほど、男のポルノに似た姿態で埋まっています。日本では、エロチカが見れるのはまだ先のことも知れません。

さて、第3の戦略は、「この形にはまったら気持ちいいんだ」という貴重な回路（欲望の回路）をなにも捨ててしまうことはないのだ、社会的な文脈で勘違いしてる奴らには腹が立つけど、よくできた欲望回路を何もそのために捨ててしまうことはないんだ、という選択です。つまり、性幻想が悪いのではなくて、それが日常に漏れ出てくることこそが問題なのだから、日常と、非日常（ベッドの上）をはっきり意識して区別してしまえばいいんだというやり方です。性幻想を性幻想として遊ぼうということです。この戦略はほとんどの女性が無意識的にも、意識的にもやっている戦略だと思います。

しかし、ほとんどの女性がやっているということと、それが有効かどうかはまた別のことです。社会の中で性を日常に囲いこむ“近代家族”のシステムでは、この戦略は無理なのではないか、ということは十分考えられます。ペアの努力以前の問題なのです。システムが“恋愛＝結婚＝家族”という三位一体を前提としているということが、性の現場である「恋愛」を、「家族」という日常の場に囲い込む役割を果たしているからです。どこまでそのシステムに乗りながら、あるいは相対化しながら、性を非日常に保持できるかということがこの戦略の大きなポイントになって行くと思います<sup>33)</sup>。

ところで、黒木香の戦略には、以上に述べたこれら3つのうちのどれでもない、第4の方法とでも言い得るものがあるのです。

## 4. 黒木香の戦略

### 第4の戦略

黒木のビデオは抜けないということを前に述べました。まさにその点こそが、第4の方法ではないかと思うのです

「わたくしはいつしか、『形而下における敗者は、その敗北を受容することによってのみ、勝者に対して形而上の勝利を手にするができる』という法則を、発見するに至ったのであります。異なるトボスにおける勝利、これこそはまさに、SMの真髄なのでした。』<sup>34)</sup>と黒木香は喝破します。すなわち、100%の受動的な存在を生き切ることによって、逆説的にそれを能動

的な「魅惑する身体」へと自覚的に転換するという戦略なのです。言い方を変えれば、その過剰性によって、社会の用意した、例えば「女はM性をもつ」といった枠組みを、越えていくのです。日常に収まるような過剰性ではだめなのです。ただ、単に“おんな”を装うことでは不十分なのです。“おんな”を120%も、200%も演じて見せるのです。

黒木は、自分が性的に「モノとして扱われること、オモチャにされること、むさぼり尽くされること」を徹底すれば、相手の優位を脅かすことになるということが身に染みていました<sup>35)</sup>。ビデオカメラの先にある、無数の視線を相手に受動性を徹底することは、不特定多数の視線に対して優位に立つことでもありました。この自覚がAV界の女王を生んだのです。

なぜ、女に黒木香が受けたのかを、もう一度考えてみます。日々のなかで、女たちは“おんな”を生きています。自分のもっている性幻想と、社会的な性差別がくっついているということもウスウス感じています。しかし、“おんな”をやるのはバランスが大切です。男の優位性を揺るがさない程度に、男を挑発しなくてはなりません。過剰に“おんな”をやると、よく言われるのが、次のせりふです。「けばい！ 素人娘だとは思えないな」。男に可愛がられるには、ほどほどに自分の“おんな”を表現しなくてはなりません。“おんな”を装うのがゼロでもいけません。装わない女は“おんな”ではないのですから、男と同じに扱われて痛い思いをするのが落ちです。

このように、現代の日本の社会で生きるときには、どこかで男の目線に合わせた配慮をすることも、賢い女の条件のひとつなのです。わたし自身が装いたいから、装うのではないのです。そして、このことは性愛の場面でも言えることです。そこを黒木香は、やすやすとクリアしていったように見えました。性の場面で、男の目線に合わせて、ほどほどの演技をするのではなく、むしろ焼け付くような、ひりひりした快楽を全身で表現していました。わたしが気持ちいいから、声を上げる。男に聞いて貰うためでも、見て貰うためでもなかったと思うのです。また、AVのタイトル「SM ぼいの好き」からわかるように、村西の打擲やアナルセックスの苦痛も主体的に受け入れていくのです。男の前に膝をついて、男の権力によって馴化されるのとは、全く意味が違います。その様子が、男にとって鬼気迫るものであったということは、想像にかたくありません。

この快楽は、私がそう感じているものなのであり、それこそが、私が私であるための根拠なのだという苛烈なまでの自己肯定が、あの腋毛に象徴されていたのです。「男の目線に合わせる」といったスタイルを放棄しながらも、男にたいして、一種の「女王」たり得た黒木香に、女たちは胸のすく思いだったに違いありません。

しかし、これらの“おんな”性の徹底は、日常世界では不可能です。それを、女たちは見抜いていました。このような戦略を可能する非日常の場、それが「AV空間」だったのです。黒木香はすべての男に対して、100%性的な存在になることで、誰のモノでもあるがゆえに誰のモノでもない、特別な女になれたわけです。

### イニシエーションとしての戦略

では、クロキ・カオルは、本名の彼女自身（恵子）にとって何だったのでしょうか。黒木香



の戦略は男にとっての「特別な女」になることで完結した訳ではありません。この第4番目の戦略では、日常が非日常なのです。黒木香が一生、黒木香として不特定多数の視線を集めることができるとは、考えられない事です。黒木香自身も、クロキ・カオルという存在を次のように言っています。「わたくしは、クロキという仮面を脱いだあと、かつて本名を名乗っていたころの人生の延長上に戻るのではなく、また別の有機体へと変容していく」<sup>36)</sup>と。

つまり、本名の恵子にとって、クロキ・カオルとは、新たな変容をかけたイニシエーションの場であり、新しい自分に生まれ変わるために通過していく世界だったのです。黒木香の第4の戦略は、イニシエーションとしてしか、全うされないものだったのです。そこでは、恵子は死んで、そのかわりにクロキ・カオルが「異常に肥大した性器と、観念的なことばがくっついたモンスター」<sup>37)</sup> となって、あらゆる全体的存在を性に局在化していくことで《祭り》を担っていったのです。彼女は「エロスの身体」を、過剰なまでに「魅惑する身体」仕立て上げて、男たちの、性的視線の突き刺さる真っ只中に身をさらしたのです。それは、ある意味では快楽であり、ある意味では苦行だったに違いありません。

「エロスの身体」と「魅惑する身体」のバランスを破壊し、惜しげもなく男たちに「魅惑する身体」をさらしてきた黒木香。彼女は「私はテリトリーを侵されたいんです」<sup>38)</sup> と、伊藤比呂美との対談のなかではっきり述べています。テリトリーとは、自身を守るための城壁です。それを崩したいという黒木は、「クロキ・カオル」像がいつか破壊され、その後の荒野にそれでも変容して生き延びていく自己を夢見たのかも知れません。

「エロスの身体」と「魅惑する身体」との間に、どんなバランスが有り得るのか。私にもわからないし、黒木にもわかっていなかったと思います。ドウォーキンが言うように、この男権社会を変えることなしに、主体的な「魅惑する身体」の復権はあり得ないのですから。残る方法は、いかにサバイブしていくかということです。私が変わることで、社会も変わる。そんな激烈なサバイバルの方法。それを、黒木はイニシエーションの先が見えぬままに探していたのです。

性によって、すべてがひっくりかえされた《祭り》の世界。ここには、自己が新しく生まれ変わるための、刺激と興奮、衝動のなかの実在感、そしてエネルギーが満ち満ちていました。

《祭り》の世界の中で、黒木香はおのれに確認するように、何度も宗教美術の研究にもどりたい、学校を続けたいと繰り返しています。まるで、自分の仕掛けたパフォーマンスに躍らされないように、クロキ・カオルという祝祭を脱ぎ捨てて日常へ戻る日のことを意識していたのだと思います。

## 途上にて

黒木香の、観念によって築き上げられた鉄壁の自己防衛は、過激に徹底的に解体されてゆきました。AVでの体験や村西とおとの出会いによって、観念のバリケードは完膚なきまでに払拭されたかのように見えます。完全な受動体となって快楽の淵をさまよい、匿名の男たちの欲望よりもっと欲望することによって逆説的に、彼女は主体性をあらわにしたのです。

しかし、そのことは、果たして《古典近代》であった彼女が、《ポストモダン》のメディア

状況を逆手にとって、「すべての男」に君臨する「女王」になった<sup>39)</sup>ということの意味するのでしょうか。私はそうだとは思いません。そうではなく、AVへの参入を、達成ではなく、「途上—イニシエーション—」と考えるべきなのです。これは、まさに《古典近代》がメディア状況という《祭り》を通過することで《ポストモダン》になり得るか、という可能性の極限的な実験だったのです。それは、メディア業界を通過機関とした《古典近代》からの離脱の試みだったのです。さらに言うなら、完成された《古典近代》の屈折した“おんな”主体から、新たな“おんな”主体を獲得する試みの1つだったとも言えるのではないのでしょうか。

女らしさという呪縛から解放され、或いは拭いがたい女らしさを相対化して、性的主体として生きることの可能性はどこにあるのでしょうか。突き付けられた女らしさという枠組みを担うのではなく、逆に操っていくという主体はいかに形成され得るのでしょうか。歴史の幻影は簡単には答えてくれそうもありません。

黒木は、自殺未遂を起こし、週刊誌などの情報<sup>40)</sup>によると、現在(94年12月)病院で、リハビリ中とのことです。回復しなければならないのは、自殺未遂の時のけがばかりではありません。心身喪失で酒に溺れていたクロキ・カオル<sup>41)</sup>は、イニシエーションの途上で、現世に戻って来れなくなった人のようでもあります。イニシエーションは、モラトリアムと化してしまい、戻ってくることの困難さを示しているのでしょうか。

恵子からクロキ・カオルへ、そしてまた新たな恵子へ、というもくろみは、クロキ・カオルという怪物に囚われたまま止まっているようにみえます。女の主体性獲得への困難な道行き、クロキ・カオルの冒険は、いまだに、途上にあるのです。

## おわりに

ここでは、1人の女の半生を考察することを通して、女の置かれた状況について見て来ました。つまり、本稿は「黒木香」というアダルト・ビデオ業界に入った1人の女が問題なのではありません。彼女の照射してみせた問題が、いかに大きく、いかに切実であったかを、今、ここにいる女の1人として、考えてみたかったのです。

黒木の転落事故や、体の不調を「身体が性的に閉じることができなくなったことの放心」<sup>42)</sup>と捕えるやり方では、何も見えて来ません。彼女は真面目な人だったので、AVには、向かなかったのだという言い方<sup>43)</sup>にも賛成できません。黒木は、自らの欲望やエロスに意識的ただけなのです。黒木香がでたビデオは、たった3本です。性行為を不特定多数に見せるという事のストレスなら、他の売れっ子女優の方がはるかに上でしょう。そうではなくて、黒木は、その先を見ていたからこそ一世を風靡したのだし、現在の苦境もあるわけです。

彼女の話言葉は、独特のスタイルをもっていました。「ワタクシ」という1人称と、「～でございます」という独特の言い回しは、育ちの良さの証しのように思われて来ました。しかし、本当はそれだけではないのです。決まり切った会話のスタイルは、自分を守るためにあります。型にはまってしまえば、自分をさらけ出してしゃべる必要は、そんなにありません。どんなに取り乱していても、型さえあればしゃべり続けることができます。型は、取り乱したり、振

り乱したりしても、言葉を失わないための、1つの処方箋なのです。だから、彼女のしゃべりは、一度言葉を失った人が、もう二度と失いたくないものとして獲得する言葉なのです<sup>44)</sup>。

奇妙なことに、転落事故の直前のインタビューで、黒木は型どおりの言葉を発してはいません<sup>45)</sup>。井田真木子というインタビュアーによって、手が入っているとはいえ、それは大きな変化だと思います。その時、井田によると、黒木香は普通の人が2時間で話す内容を8時間もかけてしか話せなかったらしいのです。それは、井田のいうとおり、ある意味では心身喪失のような状況に黒木が陥っていたことの証しでしょう。しかし、わたしはそれだけではないのだと思いたいのです。取り乱しや振り乱しを含めて、自分を表現できる言葉を、そのとき黒木は模索していたのではないのでしょうか。

わたしの思い描いたクロキ・カオルの冒険の未来は白紙のままです。けれど、彼女は苦しい状況下でも、冒険をやめなできたのです。リハビリの続く病床で、彼女は新しい自伝の執筆に取り掛かっているという情報もあります<sup>46)</sup>。恵子がクロキ・カオルに変容したように、言葉を手掛かりにクロキ・カオルがイニシエーションを通過し、わたしたちの前に、いつの日か新たな姿をあらわしてくれることを、願って止みません。

#### 註

- 1) 『〈人間〉を越えて』上野千鶴子、中村雄二郎：青土社（1989）
- 2) 橋爪大三郎によればブルジョア性道徳とは、「愛と性と婚姻が一致すべきである」というドグマをもつという。橋爪『性愛論』：岩波書店（1995）p.165
- 3) 上野、中村、前掲書 p.119
- 4) 『週刊ポスト』（1989. 1/20号）p.44-47
- 5) 『クレア』（1994. 6月号）p.100-106
- 6) 『週刊ポスト』前掲 p.45
- 7) 『インターコース』A・ドウォーキン：青土社（1989）p.119
- 8) 『女の人生すごろく』小倉千加子：筑摩書房（1990）p.8
- 9) 当然のこととして、性的対象となるのは、異性と同性の両方が考えられる。しかし、ここでは長年メジャーとして続いて来た異性愛を対象としている。同性愛におけるセクシュアリティについては、今後の課題として別稿で考察していきたい。
- 10) 永遠なる女性。男性を虜にし、破滅させる女。魅力的だが、それゆえに男たちから禁忌とされる。
- 11) 『モノグラフ・小学生ナウ 性成熟』：福武書店（1990）
- 12) 『アンネの日記（完全版）』アンネ・M・フランク、深町真理子訳：文芸春秋（1994）。この中で、アンネは自分の月経の事を、「甘美な秘密」と呼んでいる。
- 13) 『自墮落にもほどがある』黒木香：文芸春秋ネスコ（1987）p.29 黒木自身による半生記。この本の中で、黒木は自分自身を22歳（当時、1965生まれ）としている。しかし、一説（『クレア』のロング・インタビュー）では1961年生まれとなっている。どの記述が正しいかは、十分な資料がないので確定することはできないが、それはここでは重要な問題ではない。問題なのは、事実なのではなく、黒木香自身の自己イメージである。これから彼女自身の限られた資料（主に、『自墮落にもほどがある』）を使って、彼女の生い立ちを見ていくことになる。
- 14) 黒木、前掲書 p.32
- 15) 黒木、前掲書 p.49
- 16) 黒木、前掲書 p.49
- 17) 黒木、前掲書 p.141

- 18) 黒木、前掲書 p.140
- 19) 『自墮落にもほどがある』によると1986年道端でスカウトされ、最も時給のよいものということで「アダルトビデオ女優」を薦められたという。ということは、村西とおとの出会いは偶然であったということだが、当の村西は、黒木が自ら自分をクリスタル映像（村西の会社）に売り込んできたと言う（KBS、TV「アイドルお嬢さま」でのインタビューに答えて）。
- 20) 『週間読売』（1987. 12/20号）p.155での、奥出哲雄（ビデオ評論家）の発言による。
- 21) 同上
- 22) 同上。ねじめ正一は黒木香との対談の中で「ある意味であの淫乱さが正確すぎてオナニーもできないよね」と言っている。（『女と男の間には—黒木香対談集』黒木香他：飛鳥新社（1987）p.157）また、前出『自墮落にもほどがある』の中で、架空の対談を通して男は「クロキさんって、抜けないモデルとして有名でしょ？」と問いかけ、「オレもためしたんだけど、実は抜けなかったんだよね。と言うか、発情しないんだよ。（中略）これはどういうわけか。オレの、あるいは日本中のペニスの疑問の数々は、どうやらそのへんに端を発しているらしい」と続けている。
- 23) 『週間ポスト』（1989. 1/20号）p.46 上野千鶴子の発言
- 24) 『週間読売』（1987. 12/20号）p.155 奥出哲雄の発言
- 25) 『自墮落にもほどがある』黒木香：文芸春秋（1987）p.219で、黒木は「わたくしは、性の表現者であります」と言っている。
- 26) 雑誌の特集で、よくでてくる言い方で「素人風俗嬢」というのがある。風俗嬢ならば、プロであるわけで決して素人ではないのだが、それにもかかわらず、このような表現が好んで使われるのは、「素人である」ということがウリになるということを端的に示している。
- 27) 少し前までは、男だけのせりふだったが、このようなせりふを吐く女は、今は少くない。
- 28) このことを明らかにしたということで、ケイト・ミレットの『性の政治学』ドメス出版：（1970）は、画的であった。
- 29) 『インターコース』A・ドウォーキン：青土社（1989）p.140
- 30) ポルノといっても内容のソフトな、『JUDY』『デジュール』から電車の中で読めないほどの過激さを売り物にしている『コミック・アムール』『FIZZ』まで、千差万別である。
- 31) 具体的には、『fuu』、『奇麗』、『Mailin』。
- 32) 藤本由香里「女、欲望のかたち——レディスコミックにみる女の性幻想」『ニュー・フェミニズム・レビュー③ポルノグラフィ』：学陽書房（1992）p.75
- 33) もちろん、「近代家族」のシステムに乗らず、常に非日常のセックスを繰り返すこともまた可能であろう。例えば、『ニュー・フェミニズム・レビュー③ポルノグラフィ』の木村薫子（p.227-229）、『愛よりも速く』（斎藤綾子：思想の科学社（1981））の斎藤綾子を見よ。
- 34) 黒木、前掲書 p.32
- 35) 黒木、前掲書 p.129
- 36) 黒木、前掲書 p.224
- 37) 黒木、前掲書 p.228
- 38) 『性の構造』伊藤比呂美、黒木香：作品社（1987）p.117
- 39) 『〈人間〉を越えて』前出：p.119
- 40) 『女性セブン』（1994. 10/6・13号）p.86、『週間宝石』（1995. 1/5号）p.225
- 41) 『週間読売』（1994. 6/12号）p.154
- 42) 『性幻想—〈平成版〉』芹沢俊介、吉本隆明：春秋社（1995）での、芹沢の発言。
- 43) 『性幻想—〈平成版〉』前出。この中で吉本は、「黒木香は真面目で、本来こんなことできるような人じゃないという感じをぼくはどうしてもいだけわけです」と言っている。p.187
- 44) このことに気づいたのは、対談での次の中上健二の発言に負うところが大きい。「あなたの話し方って、吃音が入ってるよね」「吃音というか、何か、おしの女の子が一生懸命話してるっていう、そんなイメージがあるよ」。（『女と男の間には』前出 p.112-113）

- 45) もちろん、非常に丁寧な物言いであることに変わりはない。また、言葉使いに関しては、村西との類似性をも考慮すべきであるが、本稿では、黒木香と村西とおるとの関係については、深入りしない。
- 46) 『週間宝石』(1995. 1/5号) p.225